

双月刊行有料宅記誌 / 編集兼発行人・中村公春

蒼蒼

株式会社蒼蒼社 / 東京都町田市森野2-26-16

NO. 92

2000.4.10

「おろぎと魯迅」

「竹内実先生の受勲をお祝いする会」における講演（あとのまとめ）

竹内 実

《解題》「竹内実先生の受勲をお祝いする会」が二〇〇〇年三月十日（金）午後五時半～九時日本記者クラブ十階ホールにて七

十余名の出席者を得て開催された。ここに、その会の冒頭におこなわれた竹内実先生の講演（あとのまとめ）、および吉田富夫先生と中江要介先生の挨拶（記録テープから再生）を収録する。

私のこの講演は、じっさいに画面をみて、こおろぎのたたかうありさまを実体験してもらわないと、わかりにくいように思う。したがって、紙上に再現できない部分があるのである。

画面ではつぎのようである。
まるい皿が、拳闘におけるリングであるが、ここに登場した二匹のこおろぎは、なかなか、すもう（あるいは喧嘩）をはじめようとしていない。遠くからなにを観望しているのか、われ聞せずの態度をとり、少しづつこいてすれちがってもお互いに相手を無視する。これをビデオでみている観客、観衆はしだいに物足りぬ気分におちいり、イライラしてくる。

と、突如、あたまをぶつけた二匹が、「とりくみ」をはじめ。あと足がくつきりせ

りあがり、「ふんはっているな」とわかる。しかし、すぐパツと離れ、また、いたずらに時間が経過する。やがてふたたび頭をおしつけ、噛みあいをはじめ、一方が逃れる（ようにみえる）。

以上はビデオにみる第一試合で、第二試合はかなり派手にたちまわり、みごたえがある。

こおろぎのビデオは二十分位つづくが、講演のときは、約七分で終わった。

画面をみたあと、この体験からいえることは、こおろぎが逃げまわったり相手を無視したりしている場面では時間を長く感じ、噛みついて相手を押していつたりする場面では時間は短い。したがって、「時間は伸び縮みする」ものなのである。

私の右の結論はやや強引なようであるが、「時間」については『新版中国の思想』第六章「時間の思想」にも述べているので、あわせて参照してほしい（NHKブックス）。

以下、ビデオをはなれる。

ところで、同様の趣旨をさる会合でのべ

たところ、ドイツ語に、「長い時間」という表現があり、これは「退屈」とか、「つまらない」という意味で、逆に「短い時間」というと「緊張」とか「おもしろい」という意味だということをお教えされた。

Langweilig

Kurzweilig (小川

侃・京都大学教授の教示、一九九九年十月)。

さて、私が問題にしたいのはたんに二種類の時間があるというだけでなく、「虫文化」ともいべき「文化」があって、それは「城壁」にかこまれた人間が、せまい空間におしこめられ、それを忘れるためか、あるいは、さらに味わうためかはともかく、城内のかぎられた空間に生きつつ、隣人に迷惑をかける愛玩物として、こおるぎに着眼したということである。そして、こうした閉塞状況におかれた住民にとつての娯楽は、虫の闘争であるが、それは人間の闘争の代替品であり、象徴だということである。

魯迅『阿Q正伝』に、阿Qと小Dが偶然にであり、ケンカをはじめめる情景がある。すると、ヒマ人(原文「閑人」) この「閑

人」については、べつの機会にのべたいが集まってきたで、ヤレ、ヤレとはやしたてる。日本でも「火事と喧嘩は江戸の華」という俗な表現がある。芝居小屋や遊廓や食べ物屋はあるが、享楽しようとするれば力ネがいる。ところが、ケンカは無料で見物でき、しかも演ずる側はお互いに真剣だ。娯楽としても一級品だ。

ところが、人間の喧嘩はいつでもみられるとはかぎらない。そこで、「こおるぎ」に代わりにもうをとらせ、あるいは喧嘩をさせて、胸の中のモヤモヤを発散させよう、というわけなのだ。こうしてみると、画面でみる細い筆のようなもので(筆の穂先はネズミのヒゲだというが)、こおるぎをついて挑発するのは、つまり人間の喧嘩をみる野次馬の「ヤレ、ヤレ!」というかけ声にひとしい。

ところで、このような「挑発」は『三国志』などをよむと、単純ではない。

甲・乙・丙の三者が「鼎立」しているのが、三国志の構図であるが、甲と乙の矛盾が激化すると、甲は丙をそのかし、乙と

の間に戦争を起させ、乙を弱体にし、自分「甲の覇権を確立しようとする。このような「挑発」が『三国志』ではしばしばられる。第三者をそのかし、自分は手を汚さずに目的を達成しようとする。これが、はかりごと、「謀」である。「謀」がないという人物評は、じつはその人物を否定しているのである。

こうした「そのかし」「謀」は現代政治にも見られよう。かつてソ連と対立していた中国共産党としては、日本を味方に引きこむ必要があった。それで日本の北方四島返還要求を支持した。訪日した中国の要人は北海道まで足をのばし、北方四島を視察(遠望して)日本の要求を支持するという演説をぶつたものである。

このようなみかたは、やや「深読み」にすぎるともいれないが、「こおるぎを」「挑発」する手口を見抜いたひとに魯迅がいる。魯迅の散文詩「復讐」は永遠に対立する二人の人間を描いている。激しくにらみあっていまにも斬りあいのはじまるうとする。すると、おおくの野次馬が集まるが、いっこ

うに斬りあいが始まらないので、やがて散ってゆく。阿Qと小Dの構図である。

革命家がここで斬りあいをし、血を流しても、それはタイクツをもてあます群衆をよるこぼすだけだ。革命はやらないのがい、というのが魯迅の勧告であり、革命論なのである。『阿Q正伝』は革命を否定しているのである。創造社の若手が魯迅批判を展開したのは、それなりに正しく読みとっていた、ということになる。

民衆は血を流さず、ひと(政治舞台上のひとも含むが、自分以外なら誰でもいい)が血を流すのを見るのがたのしい。こうして娯楽はかつてローマ帝国時代、奴隷どうしをたたかわせ、勝者をほうびとして解放した見世物があったことを想起させる。相手を殺さなければ勝者にはなれず、敗者は死ぬ。

こおろぎのすもつは、こうした決死のあらそい(という勝負をたのしむ)娯楽の初歩的な形態で、こおろぎを見る観客は無意識のうちに歴史を区切る政治動乱をここに

みているのであろう。

ただし、「虫文化」への私の関心は、こうした分析にのみ集中しているわけではない。こおろぎの図鑑や容器など、もろもろの道具立てに興味こそそれ、「虫文化」ぜんたいの見取図を描いてみたいのである。

当日は「函谷関」における「鶏鳴狗盜」(のうちの「鶏鳴」)の追体験とあわせ、お茶会(お茶を点てて飲んだということ)のビデオも上映したが、これは私の近況報告のつもりだった。風土・風景にひたることのたのしさ(すでに知られていることであるが)をあらためて共感していただけたこととおもふ。

ビデオ二点の鑑賞を通じて、何らかの楽しさ、あるいは忘我の一瞬を味わっていたら、私としてはこんなにつれしいことはない。

竹内先生の二つの業績

吉田富夫

(佛敎大学教授)

こんにちは。吉田でございます。

今日、参りましたらいきなり入り口で小島朋之先生につかまりまして、「竹内先生の受勲の理由を述べろ」というわけです。

ここに来ますと、白髪の方、或いは、失礼ながら髪が無い方が少なくなく(笑)、私の先輩の方々ばかりでございます。こういったところにしゃしゃり出るのはいかがかと思えます。小島先生の御苦心は、たぶん東京の方をどなたを立てても他の方に差し障りがある、するとまあ京都からきたお前が一番無難だということでありましょう。もう時間ありませんので、お引き受けした次第であります。

ご案内の中にこう書かれております。

「先生のこのたびの受勲は竹内中国学の学問的功績と共に日中友好への長年に渡る御尽力に対する受勲である」

これに尽きると思いますが、敢えてほんの二、三分、駄弁を弄させていただきます。

まず、竹内中国学。竹内先生は、近代中国を含めてですが、現代中国を、単なるジャーナリスチックな興味の対象ではなく、学問の対象に引き据えて研究するという道を開かれた。これが竹内先生であることは誰も疑いがないと思います。

その際に、先生は二つの際立った特長を發揮された。

一つは伝統中国を無視しないこと。しかも伝統中国の中に現代中国を溺れさすのではなくて、伝統中国との関わりをなかで、独立した対象として現代中国を捉えられた。もう一つは、触れてみることに。紙の上で、或いは文献を通して考えるのもいいが、なることなら現地へ行って「コオロギに触れ、大道で売っているものに触れる。後で福引があるようですが、今日の福引の景品は、全部、中国に行かれて二束三文で買ってこ

られたものであります(笑)。その二束三文の物を買う行為が竹内中国学を支えている。私などはこれはどうにも及ばないことと考えております。

ついで、日中友好への長年に渡る御尽力について。

正確には記憶しておりませんが、先生が戦後、中国に渡られたのは一九五〇年代、まだ東大の大学院の学生であられた頃で、強制連行された中国人の遺骨を送還する船に通訳として雇われて中国に渡った。その際、天津の港で廖承志の演説を涙を流しながら聞いた、という文章をかかれております。

それから、竹内先生の日中友好への御尽力で特に強調したいのは、倉石武二郎先生と共に進められた戦後の中国語教育の草分けであるということです。戦後の日本におけるまともな中国語教育を語るとすれば、竹内実先生を欠くことは出来ないであります。

今日は大変おめでたい日でございます。先生は最近では和服を愛用なさっております。

似合うか似合わないか、これは美学の問題でございます(笑)。先生はご自分では大変似合うと思っていらっしゃる。すると、周囲も似合うと思っちゃう。これもご人徳かと思えます。

以上、しゃしゃり出たことを申しあげました。

先生のこれからのお仕事が始まります盛んであることを、皆さんと一緒に祈りしたいと思えます。

「コオロギ叙勲」

中江要介

(日中関係学会会長)

皆さん、こんばんは。ただいまご紹介いただいた中江です。

吉田先生がおっしゃったように、私も、今日、小島先生から急に話をしるという命令を頂戴しました。よくよく考えてみると、小

島先生をして、コオロギの私をそそのかすように仕向けられたわけです。皆さんをさしおいて、私がここでお祝いの言葉を申し上げるのは僭越なことです。私以上に中国のことを勉強され、竹内先生と御親交のあられる皆さん方を前にして口幅ったいことは言えません。ただ私はいま日中関係学会の会長をやっております、竹内先生は関西の方の会長をお引き受けただいております。そういう関係で平素のご恩返しに一言申し上げたいと思っております。

日中関係を考えているときに、私は竹内先生と何度もお話をする機会、お教えを請うことがあったんですけれども、私が一番感心していることは、竹内先生の口からは「日中友好」という言葉が出ないことです。私どもの日中関係学会は、「日中友好」を言わない学会なのです。最初からそういう覚悟でやっております。「友好」「友好」と口に出すのは、友好とは関係がないことです。

竹内先生は、あるときには鶏を鳴かせ、あるときにはコオロギを喧嘩させ、あると

きには朝早く小鳥を鳴かせる中国人の姿に注目される。そういうところから中国というものをじっくりと見ていられる。これは学者としてのひとつの姿勢だと、私は思っているんです。それが今度の叙勲に繋がっている。そういう意味で、竹内先生の叙勲はコオロギ叙勲だと言えるのではないでしょうか。

今日は、一般の方の叙勲とは違った非常に味わいのあるお祝いのパーティです。本当にご同慶の至りです。こういうところに立たせていただきましたので、壇上から皆さんの名において、竹内先生に心から「おめでとございます」と申し上げます。

資料

「竹内實先生の受勲を
お祝いする会」へのお誘い

拝啓 新しい年をむかえ皆様にはお変わりなく御健勝のことと拝察申し上げます。さて、ご存じのとおり竹内實先生におか

れては昨年秋に勲三等旭日中授章をお受け
になられました。

「竹内中国学」の学問的功績とともに日
中友好への長年にわたるご尽力に対する受
勲であり、竹内先生とご縁を得た、あるい
は教えを受けたわれわれにとって、これに
すぐる慶びはありません。

先生には京都大学人文科学研究所所長を
定年退職されてからも、立命館大学国際関
係学部長、北京日本学センター主任教授、
杭州大学・廈門大学客員教授、松阪大学客
員教授を歴任され、現在、日中関係学会副
会長・理事、カルビー日本研究基金顧問、山
崎豊子文化財団評議員、官休庵武者小路千
家学事顧問、京都市国際交流協会評議員と
して日中関係の発展に寄与されています。

一九九四年四月に古稀のお祝いの会をも
ちましたが、このたびも先生とご縁を得た
方々を中心に、お祝いの会を開き、ご功績
に対する叙勲をお慶びするとともに、久し
ぶりに先生を「肴」にして、日中関係と中
国研究の前途を語る一刻をもちたいと存じ

ます。この機会にお世話になった皆様に感
謝の微意をあらわしたいと御本人もおつ
しゃっておられます。

そのため、会の冒頭で竹内先生にご講演
(約四十分)をお願いしております。

皆様にはご多用とは存じますが、是非と
もご出席を賜り、ご歓談の時間をお過ごし
くださいますようお願い申し上げます。

敬具 二〇〇〇年二月吉日

「以下、小島朋之(慶応義塾大学教授)ら
二十五名連署」

中国的なるものを考える

社会運動と戯劇

伝播と速度の番外編

福本勝清（明治大学教授）

各々の社会運動の伝播には、その運動なりの速度がある。前回、そう書いた。その速度を決めるのは、個々の社会運動が、どのようなコミュニケーションの手段を用いるかである。書き言葉によるのか、話し言葉によるのか、近代的な交通手段や通信手段を用いるかどうか、といったことが伝播の速度を決めたのである。学生運動、労働運動、農民運動、紅槍会運動といった民国期の社会運動の各スペクトルにおいて、それぞれがどのように書き言葉、話し言葉に依拠し、交通手段や通信手段を利用していったのかを、指導者と活動家、活動家と大衆との二つの関わりにおいて、違いを明らかにしたつもりであった。

が、前回分を読み返しているうちに、とんでもない誤りを見つけた。文中、「学生運動では、指導者と活動家の関わりにおいても、活動家と大衆との関わりにおいても、いずれも話し言葉を媒体とし、都市間コミュニケーションを利用して点で同質であり、そこに他の社会運動との際立った違いがある」（第九一―八頁、下三段目）とあるが、この「話し言葉」は間違いで、当然「書き言葉」でなくてはならない。全く文意が逆になっており、弁解の余地がない。さて、今回の主題は、このような社会運動の各スペクトルの間にあるような相違は、他のフィールドにおいても存在するのではないか、つまり表題からわかるように、戯劇もそのフィールドの一つではないかということである。

実のところ、筆者は芝居や演劇に対してはまったくの門外漢である。だから、筆者の戯劇の知識というのは、民国社会史の資料として読んだものに限られる。何故、戯劇つまり伝統劇なのかという点、その一つは、役者の回想記や略伝のなかには思わぬ

拾い物があるからである。たとえば、革命家や知識人の伝記や回想録のなかから、彼らが生まれ育った地方の、複雑で多様な社会システムを読み取ることは不可能である。そこには地主らしい地主、小作人らしい小作人しか出てこないし、そのような社会に反抗し、左翼思想を受け入れ、敢然と故郷を巣立つ、ステロタイプ化した青年しか登場しない。なかには羅明（羅明路線の羅明）のように、同族の支援で高級中学や大学に進学したものもいたはずだが、そんな記事を目にすることは滅多にない。政治家や知識人の伝記や回想録には強力なバイアスがかかっており、そのバイアスをすり抜け、実際に彼や彼女が生きた時代や社会の詳細や息吹を伝えるのは、すごく難しい作業であるらしい。

ところが、役者の半生や生涯の記には、けっこう本当のことが書かれているように見える。我々門外漢にはわからない別のバイアスがかかっているのかも知れないが、政治家や知識人に対するバイアスのようなものはかかっていない。残念ながら、役者

が育つた農村における幼年時代や少年時代の記述は、短いものが多く、それほど深いいろいろなことがわかるわけではない。が、さすがに、役者となって以後、農村各地を回る旅一座の話になると、俄然精彩が出てくる。たとえば、役者を出したことを恥だと思ふ同族のものが、若者を取戻そうと執拗に追いかけてくる話とか、芝居にはパトロンがつきものである、地方の顔役が旅の一座に難癖をつけるのは、日本でも中国でも同じだが、一座の花形である若い娘をその顔役が酒席に呼び出し手込めにしようとする話とか、旅の一座に加わつた得体のしれない流れ者が、夫のある女優者を力づくで連れ出そうとする話とか、いろいろな興味がひかれるものにぶつかる。

話を本題に戻すと、このような戯劇には、社会運動もしくは大衆運動に似た種々のスベクトルが存在する。それを分けるものはまず、どの程度、共通語や方言を用いるのかである。これは、都市間コミュニケーションの手段を用いるかどうか、農村的なコミュニケーションの手段を用いるのかの相

違でもある。

たとえば、学生劇や左翼演劇は共通語を用い、極めて知識的な理念に引きずられているのが特徴である。演出家も役者も、台本（書き言葉）により、理念を共有化することができる。さらに役者もまた強い理念的なメッセージを観客（文字を知る者）に送り続ける。

それに対し方言を用いる話劇がある。おそらく民国期の話劇運動は、自らを民衆化しようとするれば、そうせざるをえなかつたであろう。演出家や役者は、それぞれ同じ理念に引きずられていたとしても、観客に対しては娯楽を提供し、その娯楽に近代的な理念を織り交ぜメッセージを発する。その場合、ある程度方言を用いざるをえず、その程度とは、彼らが想定する観客の知的水準によって決められていたであろう。

たとえば、八路军や新四軍、人民解放軍は、つねに文芸宣伝隊や劇団を率いていたが、その場合、出し物は、農民にメッセージを伝えることが目的である以上、ほぼ全面的に方言を用いざるをえなかつたのである

う。が、演出を担当した都市出身のインテリと農村出身の劇団員の間に共有されていたのは、抗日とか農村の民主化といった極めて理念的なものであつた。

伝統劇である京劇や昆劇の場合は、どのように考えればよいであろうか。京劇や昆劇で話される言葉が、共通語的なものであるのか方言的であるのか、門外漢の筆者には理解できないが、劇作家や指導的な役者の間には、士大夫的な理念が存在するように思える。さらに、役者、観客ともに都市の住民であることから、用いているコミュニケーションの手段においても、近代的であるかどうかは別として、都市的であるように見える。

漢劇、粵劇、徽劇といった地方大戯、さらに黄梅戲、花鼓戲といった民間小戯の場合、より方言的なもの、より農村的なもの、の度合いが増す。また、士大夫的な理念からもいよいよ遠ざかる。漢劇、徽戲などの場合、まだ正統的なものとして官や郷紳の庇護が期待できたかもしれないが、黄梅戲や花鼓戲の場合、淫猥なるものとして郷紳

から攻撃され、時には官の取り締まりの対象となった。地方大戲の観客が主に地方都市の住民であったこと、芝居通を称する観客に対し、京劇や昆劇などの古典から吸収した芸や筋立てを披露しなければ満足させられなかったことも、彼らの地方芸能における正統性やそれに伴う自負を形づくった。それに對し、民間小戲の観客は農民であり、地方大戲の一座が回るコースより、より草深い農村を回らねばならなかった。

当然、民間小戲であつても、地方大戲に肩を並べるものもでてくる。一九一一年前後、浙江 県一帶の農村から起り、浙江各地に広がった越劇は、何度が上海進出を試みた後、一九二三年、役者全員が女性のみの劇団として上海に登場、一九三〇年代にはついに上海を席卷、全国に知られるようになった。これまで何回か言及してきた黄梅戲は、湖北黄梅県の採茶調から起り、安徽懷寧県を中心とした安慶地区に広まったものである。もともと農民の娯楽であつたものが、次第にそれを農閑期に専門に行つた季節性の劇団（一座）を生み出し、さら

に古典の流れである「高腔」や地方大戲である徽戲から影響を受け、戯劇としての体裁を整えたといわれる。

一九二六年、すでに安慶地区の農村を席卷していた黄梅戲は、ついに安慶市内に進出する。とはいつても官憲の取り締まりを恐れ、旅館や屋敷の中で、見張りを立て、短時間の上演ですますという状態であつた。舞台上演は、同年冬、北伐軍が武漢を占領した頃、それに励まされるようにして、ようやく始まる。その後、三〇年代にかけ、黄梅戲は安慶に何とか根を張る。

一九三三年の春節、懷寧の季節性のセミアプロ劇団のメンバー八人が上海を訪れる。上海南市には安慶地区からの数多くの出稼ぎ労働者が住んでいた。出稼ぎたちは、黄梅戲を自ら歌い演じて慰めていたが、出し物の数も少なく、演技の水準も低かつた。どうしても本物の役者の演技を見たくなつた彼らの招きに応じて、役者たちがやつてきたのである。長江大洪水（一九三二年）以後の農村の荒廃、特に三四年の大旱害に追われ、安慶地区から次々と三十数人の役者

たちが上海に逃げて来る。だが、黄梅戲は、安慶人には喜ばれても、上海の観客の支持を受けることはなかつた。演技の水準はもちろんのこと、上海人には何を唄つていいのかわからなかつたのである。その後、必死の努力の結果、少しは客も増えたにしても、越劇のようにもてはやされることはなかつた。結局、彼らは同郷人の援助を受けて何とか食いつなぐほかなく、三七年抗日戦争が勃発、彼らも上海を脱出するが、その際船賃もなく、何とか鼻肩筋の知り合いの船員の目こぼしを得て、ようやく郷里に戻ることができた。だが、彼らの上海滞在は無駄ではなかつた。役者たちはすきつ腹を抱えながらも、京劇、滬劇、越劇など上海で人気を博している劇を見て回り、著名な役者、スターの演技から、貪欲に吸収していった。芸を磨き、演目を増やすだけでなく、衣装や音楽にも工夫を凝らすことを覚えた。また、上海上演の反省から、男だけの劇団ではなく、男女混合の劇団に変わらなければ観客の支持を受けることは難しいということも理解したのであつた。

台湾の総統選挙

台湾の総統選挙は、二〇〇〇年三月一日に行われ、即日開票され、野党民進党の候補陳水扁が勝利した。国民党の歴史的敗北である。

陳水扁は一九五一年二月一八日生まれ、四九歳、名門台湾大学法学部を卒業した弁護士である。一九七九年に高雄市で起こった美麗島事件（国民党に所属しない人々が雑誌『美麗島』を創刊して弾圧された事件。今回副総統として当選した呂秀蓮女史はこの雑誌社の社長）において雑誌発行人黃信介の弁護士として活躍し、さえた弁舌で令名を馳せた。台湾初の野党民進党の創立（一九八六年九月）に際して常務委員となり、立法委員（日本の衆院議員に相当）を一期務めた。

九四年の台北市長選挙に野党として初め

て当選したが、九八年の市長選では再選はならず馬英九現市長に敗れた。九四年の市長選挙は、国民党が分裂したために漁夫の利を得たが、九八年には国民党が統一候補にしぼったために敗北した。

今回の勝利のパターンは、九四年に似たケースであり、国民党の分裂に助けられた。とはいえ、過去一〇年の得票率を冷静に分析すると、国民党の長期低落傾向と民進党の長期遞増傾向は明らかであり、与党と野党の逆転は時間の問題とみられていた。

つまり陳水扁の勝利は決して偶然ではない。台湾の人々は「変天」（革命）と呼ぶが、まさに「平和革命」、平和的権力交替である。台湾の民意は腐敗政治の大掃除を求めた。

国民党は一九四九年に大陸を追われて台湾に移つて以来、およそ半世紀にわたって独裁政治を続けてきたが、ついに敗れた。国民党の分裂選挙に加えて、あまりにも候補者の選択がまずかった。李登輝総統は後継者として副総統の連戦氏を選んだが、

同候補は第三位で惨敗である。国民党から除名され無所属で立候補した宋楚瑜候補（元国民党秘書長、台湾省長などを歴任）の得票数にはるかに及ばなかった。

宋楚瑜を除名せず、「宋楚瑜総統候補、連戦副総統候補」というコンビを組めば、確実に勝利しえたはずだから、後継者作りには大失敗した李登輝に対する不満が爆発したのは当然である。李登輝は九六年の当選以後、自己過信し、側近政治に陥っていた。台湾省政府をつぶして宋楚瑜省長（当時）と対立し、「両国論」で大陸側の猛反発を招いたなどはその一例にすぎない。裸の王様の姿が暴露され、人々は「李登輝の空気票」と揶揄している。つまり前回五割を超えた李登輝人気は泡のごとく消えたのだ。

これは旧ソ連の解体劇に似たところがある。

旧ソ連邦のゴルバチョフはロシア共和国のエリツィンと対立したが、蓋を開けてみると、権力を掌握していたのはエリツィン側であった。台湾では李登輝の「中華民国政府」と宋楚瑜の「台湾省政府」が対立し、

李は省政府をつぶした。しかし今回の選挙が示したのは、宋楚瑜こそが民意の支持を得ていた事実である。担がれていた「李登輝神輿」が担いでくれる宋楚瑜を斬ったことがドラマの核心である。

連戦個人の魅力の欠如はいうもさらなり、「世界一の金持ち政党」といわれる国民党が豊富な資金力と組織力を動員して金権選挙を行ったにもかかわらず、無残な敗北を喫したところに台湾の民主化の定着ぶりを見ることができよう。

選挙前、ある大学教授はこう述懐していた。

「今回の選挙では、誰が当選しても構わないが、台湾の民主主義の将来を考えると、最も力ネをばらまいた人物だけは当選してほしくない」と。

総統選挙はそのような民意の勝利、良識の勝利である。

陳水扁新総統に対して、「台湾独立を掲げる民進党候補の当選は台湾海峡に新たな問題を投げかける」というコメントが多い。事実選挙の直前に、大陸側が最も歓迎しな

い候補として名指しの批判さえした。しかし台湾の世論はこの種の恫喝に屈しなかった。

では、独立という政治主張はどうなるのか。

陳水扁は「大陸が武力攻撃しなければ、独立を宣言することはない」と選挙中に繰り返し、当選後は「建設的な対話」を呼びかけている。民進党が台湾独立を掲げる政党であることは確かだが、野党として願望を述べることと与党として現実の政治をどう進めるかは別の事柄だ。台湾独立が現実的政策たりうると信ずる者は民進党のなかでも限られている。

実際、今回の選挙では「汚職と腐敗の国民党打倒」が主なスローガンであり、台湾独立は主張していない。むしろ連戦陣営は大陸側と合作したかのごとく、「陳水扁は戦争を意味する」と煽動し、これが失敗した形だ。陳水扁の勝利を独立派の勝利とときめつけるのは妥当ではない。

かつて台北市長陳水扁は党派や省籍、族籍にこだわらない人物本位の人事を断行し

て市民の歓迎を受けた。今回も同じく柔軟かつ現実主義的な政策を進めるであろう。北京は硬直的な台湾政策を改めて、柔軟な姿勢で対話を再開してほしい。宋楚瑜を除名しなければ勝利したはずと李登輝現総統の失敗を非難する声も聞かれる。台湾の民主化に対する李総統の功績は大きい。最後はまずい幕切れであり、大きな汚点を残しての退場となる。

五月二〇日の記者会見で陳水扁は「中台双方が対等な関係に立ち、一つの中国を議題にとどめるだけ（前提しない）ならば、いかなる対話も可能だ」と語った。陳は李登輝路線の継承を語りつつも対話の進展に前向きであり、台湾経済界の交流拡大への期待も大きい。

このような新たな潮流に対して、江沢民国家主席はコンゴ大統領との会見の席上、「一つの中国の原則を認めることが対話の前提だ」と繰り返しつつも、対話の契機を模索し始めた。つまり、大陸側は総統選挙以後、台湾に対する威嚇的言辭は一切避けて、陳の今後の発言、行動を見極める慎重な姿

勢を明確に打ち出した。

いまのところ、互いに相手の出方を伺う段階であり、応酬はすれ違いに見えるが、台湾海峡の疑似緊張は緩和に向かう可能性が強いと私は読む。

『読売新聞』識者座談会に おける矢吹発言の抜粋

【二〇〇〇年三月二〇日八面。座談会出席者は井尻秀憲東京外国語大学教授および志方俊之帝京大学教授（元陸上自衛隊北部方面総監）。以下は矢吹の発言部分のみ抜き書きしたもの。】

か 台湾総統選挙の結果をどう評価するか

今回の総統選には二つのポイントがある。

一つは国民党の分裂選挙。陳勝利は、九四年に同氏が台北市長に当選した時と似ている。国民党の分裂が民進党を利した「漁夫

の利」だ。もう一つは連戦氏の惨敗。これは李登輝総統の失敗でもある。具体的には九七年に、宋氏が省長を務めた台湾省政府の廃止を決めたことだ。「中華民国」を台湾に限定したわけだが、やり方が強引だった。宋氏は省長として実績をあげ、今回の大量票に結びついた。「宋楚瑜 連戦」コンビで戦えば、国民党は絶対に勝てた。それができなかったのは、李総統が九六年、総統選挙に勝って以降、側近の意見にしか耳を傾けず、裸の王様になってしまっていたからだ。

選挙選の勝敗を決めた要因は何か。

国民党は世界一のカネ持ち政党と言われ、最後はカネと組織力で連氏に決まると思っていた。長期政権に腐敗はつきもので、民意は陳氏に国民党政治の大掃除を託したのだろう。

中国は李総統の「二国論」が飛び出したために「台湾白書」で牽制したといい、台湾は、クリントン大統領が九八年の訪中時

に台湾の独立不支持など「三つのノー」を表明したことで孤立感を高めて、「二国論」を提起した。江沢民主席と李総統はともに疑心暗鬼になり、相手側に過剰反応した。互いに意思疎通があれば、本来は避けられた摩擦だろう。

中国は武力行使を放棄しようとしているが。

台湾問題は、植民地化によって切り離された同胞が一緒になろうという話で、武力行使などあり得ない。ただ（武力を）使わない」と約束すると、相手にみくびられるから約束しただけだ。武力はいわば伝家の宝刀で、抜いたらおしまい。しかし、それを表に出し、「言うことを聞かなければ、交渉に応じなければ、武力を使う」などというのは全く本末転倒で、政治家とはいえない。国際社会からも敬遠されるだろう。いまの中国指導部がいかに自信を失っているかを示している。その意味では、台湾の方で相対的に余裕がある。

中国は統一を急いでいるようだが。

鄧小平氏の台湾政策は非常に柔軟だった。江主席はそれを守っていない。「一国二制度」の内容に関連し、鄧氏は中央と地方（台湾）という言い方をするなど言っている。

次は連邦制で、「二つの中国」容認になるため言葉としては使えないが、鄧氏は限りなく連邦に近い形での統一を考えていた。統一期限の問題でも、江沢民政権は「もう待てない」と非常に性急だが、鄧氏は時間をかけてゆっくり考えればいいという態度だった。中国は二〇〇二年秋に党大会を予定している。江氏が党総書記から引退する場合、残された時間は二年半で、それまでに解決のめどをつけたいと焦っているのかもしれない。

陳氏の課題

李総統就任時も「学者政治家に何ができるか」との議論があったが、彼は国民党の

古参議員をまとめた。陳氏は若く、事実上の「台湾党」の形で、超党派の執行部を作るのではないか。台北市長就任時も、外省人（大陸出身者）や客家などを登用し成功した。

米中間係

（米中間では）安全保障問題が前面に出ている。だが、（九五年の）李登輝総統の訪米時のボタンのかけ違いに始まったのだから、ポスト李登輝時代は局面が変わるのではないか。また、中国が今年、世界貿易機関（WTO）に加盟すれば、経済の相互依存はさらに深まる。グローバルな世界経済の構築、その中での東アジアのリージョナルな関係の構築が始まっている。アジア各国の経済危機からの回復の過程に中国も当然、巻き込まれている。香港、台湾経済がそのカナメであり、相互依存の拡大、発展が政治の中心となっていけば、局面はかなり変わる。日本はその流れを促進する必要がある。